

## 殉教、迫害を乗り越えて

使徒言行録7章54節～8章8節  
2021年7月18日  
松田 基子 師

キリスト教の歴史は、イエス・キリストの十字架、復活、昇天によって、人類への救いの道が開かれ、『この福音を伝えよ、との、**大宣教命令**』から二千年が経ちました。その間、福音は、人から人へと伝えられ、今日、全世界を網羅し、キリスト教信仰者は、世界の3分の1を占めていると言われてしています。しかし、この様に福音が世界に広がって行くためには、この世との戦いがあり、その歴史は、迫害と殉教によって開かれた道でありました。なぜ、迫害を受けるのでしょうか。その根本は、人間が、自分の命の与え主である、創造主なる神様に背いて、自分を神とし、**自分を正しいとして、生きようとするから**です。

人間自身は、神様から離れているために、その事が分からず、自分たちの立場、自分たちの世界を守るために、神様からの真理を伝える者を受け入れることが出来ないで、抹殺せずにはいられなくなり、迫害するのです。その構図が、キリスト教最初の殉教者、ステファノの殉教に示されています。初代教会では、12人の使徒達が、福音宣教に専念するために、共同体の運営面を担当する7人を選びましたが、ステファノはその中の1人で、彼は実務ばかりではなく、使徒に匹敵する能力の持ち主でした。

使徒言行録6章8節を見ますと、

「ステファノは恵みと力に満ち、すばらしい不思議な業としるしを民衆の間で行っていた。」とあります。彼は、ヘレニストとして、語学と、弁舌に優れ、反対者と十分に議論出来る能力を有していました。

エルサレムには「解放された奴隷の教会」、口語訳では、リベルテンと言い、これはローマのポンペイウスが、紀元前63年に、エルサレムを占領した後、捕虜となって、ローマの奴隷になった人で、後に解放された人を指していると言われます。協会共同訳では、

「解放奴隷と、キレネ人とアレクサンドリア人の会堂」

と訳されています。そのユダヤ人会堂がありま

した。彼らの許(もと)に、現在の小アジア地方、キリキア州や、アジア州出身の人々が加わりました。彼らは離散の民ディアスポラで、ギリシャ語を生活言語に使い、ヘレニズム文化の中で成長した、ヘレニスト達でした。

その彼らにとって、一度母国を離れた経験は、自分たちが神の選びの民であり、神様から特別に律法が与えられたことに、イスラエル人としての、強い帰属意識を持つことになりました。彼らは律法と神殿を誇りとしていました。そんな彼らにとって、ステファノの言葉は耳触りでした。そこで彼らは、ステファノと議論しました。しかし、6章10節を見ますと、

「彼が知恵と“**霊**”とによって語るので、**歯が立たなかった。**」

とあります。その結果彼らは、人々を唆(そそのか)して

「わたしたちは、あの男がモーセと神を冒瀆する言葉を吐くのを聞いた。」

と言わせて、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動して、ステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行き、訴えました。

偽証人達は悪びれもせず言いました。私たちは、彼がこう言っているのを聞いています。

「あのナザレの人、イエスは、この場所を破壊し、モーセが我々に伝えた慣習を**変えるだろう**」

と。彼らが問題にした言葉は、ヨハネ福音書2章で、イエス様は、神殿の宮聖めをなさいましたが、この時、2章18節で、

「ユダヤ人達はイエス様に、『あなたは、こんなことをするからには、**どんなしるしをわたしたちに**見せるつもりか。**』」**

と尋ねてきましたので、イエス様は、

「この神殿を壊してみよ。**3日で建て直して見せる。**」

とお答えになりました。イエス様は、ご自身の十字架と、復活の事を言われたのですが、真意をくみ取ろうとしない反対者達は、その言葉を自分たちの都合に合わせて、イエス様を訴え、また、ステファノを同じ理由で訴えたのでした。

一方、虚偽の訴えに対して、当のステファノは

どういう態度だったのでしょうか。

6章15節に、

「最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら、天使の顔のように見えた。」

とあります。聖霊に委ね、聖霊に支配された人の姿でした。大祭司は、ステファノに、

「訴えのとおりか。」

と尋ねましたが、彼は、訴えについての弁明を一切することなく、そこで説教を始めました。

それは、イスラエルの歴史を振り返るものでした。アブラハムに始まる神様の選びと、土地を与えるとの約束を語り、孫のヤコブからは、12人の族長達が生まれましたが、兄弟達はヨセフを妬んで、エジプトへ売りました。しかし、神様はヨセフを離れず、あらゆる苦難から助け出して、エジプト王ファラオの下で、恵みと知恵をお与えになりました。やがて、飢饉が起こり、ヨセフを売った兄たちは、ヨセフによって食糧豊かなエジプトに迎えられ、助けられました。400年後、彼らの子孫、イスラエルの民は、エジプトで数を増しましたが、奴隷として苦役に苦しんでいました。

モーセはファラオの命令でナイル川に捨てられましたが、王女に拾われ、王女の子となり、エジプト最高の教養、武術、指導力を身に付けました。モーセは正義感から、エジプト人に苦しめられていた同胞を助け、同胞の力になろうとしましたが、仲間同士の争いの仲裁に入ると、

「誰がお前を我々の指導者や、裁判官にしたのか。」

と拒否されてしまいました。以後40年間、モーセはミディアンの荒れ野で、羊飼いとて、自分の力に頼れない生き方を学びました。

名もない一介の羊飼いであるモーセを、神様は呼び出して、イスラエルの民をファラオの奴隷の身から、救出されました。ステファノはその事を、7章35節で、

「『だれが、お前を指導者や裁判官にしたのか。』

と言って拒んだ、このモーセを、神は柴の中に現れた天使の手を通して、指導者また解放者としてお遣わしになったのです。この

人がエジプトの地でも紅海でも、また40年の間、荒れ野でも、不思議な業とするしを行って人々を導き出しました。」

と、モーセの働きを示し、7章38節で、

「この人(モーセ)が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。」

と律法が与えられた事を言っています。

律法こそは、神様がイスラエルを、神の民に育てられる導きの書でした。けれども先祖たちは、神様とモーセに、信頼せず、モーセの下山を待ち切れないで、モーセを退け、神様を退け、エジプトを懐かしく思い、彼らは、若い雄牛の像を造って、この偶像に犠牲を捧げ、自分たちの手で造ったものを奉って楽しみました。

そのようなイスラエルに対して、神様は使徒言行録7章42節に記されていますように、

「そこで神は顔を背け、彼らが天の星を拝むままにしておかれました。」

とあります。イスラエルの歴史は、偶像礼拝との戦いの歴史でもありました。預言者は偶像礼拝を厳しく糾弾しました。特に、アモスは、アモス書5章27節で、

「わたしは、お前たちを捕囚として、ダマスコのかなたの地に連れ去らせる。」

と預言しました。ステファノは、その預言の成就として、7章43節で、

「バビロンのかなたへ移住させる。」と言い換えて、バビロン捕囚は、イスラエルの偶像礼拝の結果であったと言っています。44節からは、神殿について、その根本精神を説いています。

神殿はソロモンによって建てられましたが、7章49から、神様は、

「天はわたしの王座、地はわたしの足台。お前たちは、わたしに、どんな家を建ててくれると言うのか。わたしの憩う場所はどこにあるのか。これらはすべて私の手が造ったものではないか。」

と神様は、神殿などに住まれない超越したおかたであることを言っています。

ステファノはイスラエルの歴史を通して、先祖達はいつも、神様の御心に従わないで、神がお遣わしになった人を拒否して来た歴史を浮き彫りにしました。その上で、モーセが言った言葉が、7章37節に記されています。

「このモーセがまた、イスラエルの子らにこう言いました。

『神は、あなた方の兄弟の中から、私のような預言者をあなた方のために立てられる。』」

とあります。モーセが言った、私のような預言者とは、イエス・キリストのことです。モーセは申命記18章15節で、

「あなたたちは彼に、聞き従わなければならない。」

と命じています。それなのに、ユダヤ人たちはそのお方を、十字架に架けたのです。

ステファノは臆せず、最高法院に向かって言います。51節に、

「かたくなで、心と耳に割札を受けていない人たちが、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたがその方を裏切る者、殺す者となった。天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守りませんでした。」

と、ステファノはユダヤ最高議会で、居並ぶ指導者達に対して、はっきりとその罪を告発しました。ただ、このことは聖霊の支配に服することなくして出来る事ではありませんでした。

ステファノは真剣に、同胞の信仰を案じているのです。しかし、直球は、よほど砕かれた柔らかい心でなければ、受け止めることが出来ません。54節を見ますと、

「人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。」

と言うのですから、彼らの心は岩のように固く、ステファノを抹殺しないではいられない怒りに燃えました。一方ステファノは、聖霊に満たされ、天を見つめました。聖霊は神の栄光と、神の

右の座から立ち上がって、ステファノを見守っておられるイエス様の姿を見せて下さいました。

ステファノは56節で、

「天が開いて人の子が神の右に立って居られるのが見える。」

と言ったのです。人々は更に怒りに燃え、大声で叫びながら、耳を手で塞ぎました。

彼らの考えからは、十字架に架けられた重罪人が、神の右の座の栄光を受けているなどと言うことは、決して受け入れられない、耳を塞いで、聞く事のできない言葉でした。人々は、ステファノを神の冒瀆罪に定め、都の外に引きずり出して、自分たちの律法解釈で、石打の刑を執行しました。

証人達が先ず石を投げるのですが、投げやすい様に、上着を脱ぎました。証人達は、自分たちの上着をサウロという若者の足もとに置いたのでした。彼は、ステファノの殺害に賛成していました。サウロはどんな思いでステファノを見たのでしょうか。イエス様の目は、彼の上にも注がれていました。

さて、59節を見ますと、

「人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼び掛けて、

『主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい。』と言った」

とあります。その姿は真に、イエス様が十字架上で、ルカ福音書23章48節で叫ばれた、

「父よ、私の霊を御手に委ねます。」

その姿と同じ姿でした。そればかりではなく、ステファノは60節で、

「ひざまづいて、

『主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい。』と大声で叫んだ。

ステファノはこう言って眠りに就いた。」

とあります。

イエス様はルカ23章34節で、十字架上で、  
「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのか知らないのです。」

と執り成されたのでした。ステファノは聖霊に依って、イエス様の心を頂き、イエス様を証して天の御国へと帰り、イエス様は御座から立ち上

がって、ステファノをお迎えになりました。このステファノ殉教の日、エルサレムの教会に大迫害が起こりました。使徒たちの他は、皆、エルサレムを出て、ユダヤとサマリアに散って行ったのですが、彼らは何と、行く先々で、隠れるどころか、福音を語って歩いたのです。かの、選ばれた7人の中の一人、フィリポは、ステファノ同様、聖霊に依って福音を語ると共に、病の癒しの力が与えられ、サマリアの町で、大きな働きをする事が出来ました。

聖霊は、教会の危機をも用いて、この世の力に屈することなく、福音を広めて行かれました。そうして、福音は、あらゆる機会を捉えて、更に遠く、更に広範囲へと、伝えられて行きました。しかし、それは、どこへ行っても、既存の社会に対して、その罪を正し、永遠の命を示すものであるため、あまりにも衝撃的で、為政者には都合が悪く、迫害を受けることは必至のことでありました。

日本もキリシタン迫害の歴史を負っています。日本にキリスト教が伝えられたのは、1549年フランシスコ・ザビエルによってもたらされました。豊臣秀吉は、当初、キリスト教を容認しましたが、1587年キリシタン禁令を出しています。その後、1596年土佐(高知)沖に、スペイン船サン・フェリペ号が漂着したのですが、その時、奉行の調査に対して、船員は、世界地図を示し、スペインが広大な国土を有し、日本が如何に小国であるかを語り、スペイン国王は、先ず、宣教師を送り、布教活動を行うと共に、征服事業を進めると語ったのだそうです。そのため、危険を感じた秀吉は、京都、大阪の宣教師と日本人信徒を捕らえさせました。そして翌年1597年2月5日、長崎の、西坂の丘で26聖人は十字架に縛られ、槍で処刑されたのでした。長崎の26人記念館に行きますと、三木パウロが十字架上から人々に向かって、福音を語っている等身大の像があって、胸を打ちます。彼らはサン・フェリペ号事件に連座させられ、処刑されました。三木パウロはイエズス会の修道士でしたが、最後の最後まで、

「私はこの死罪、殉教について、太閤様を始め、お役人衆たちに、何の恨みも抱いて居りません。ただ、私が願うのは、太閤様を初め、

お役人、そして日本の全ての人が、キリストを信じて、救いを受け、キリシタンになって下さる事です。」

と唯一の救いを語り続けたのでした。

続く徳川幕府も、キリシタン禁教令を發布し、キリシタンを迫害しました。迫害は、この世の力が勝っているかに見えますが、パウロはローマの信徒への手紙8章18節で、

「現在の苦しみは、将来私たちに現れる筈の栄光に比べると、取るに足りないと、私は思います。」

と言っています。地上で信仰故に、受ける苦しみは、確かに辛く苦しいものですが、それは何時迄も続くものではありません。

それに比べて、神様がお与えになる永遠の命の栄光は、永遠に取り去られる事の無い、祝福です。代々のキリスト者達は、その価値を知って、この地上の迫害の苦しみを乗り越えて行きました。私たちの今の平穏な信仰生活は、代々の聖徒達の尊い犠牲によるものです。私たちはその事を忘れず、天を見上げ、永遠の栄光に目を注ぎ、福音を証し、信仰を守りぬいて参りましょう。

お祈りを致します。

愛と恵みに富み給う、天の父なる神様 私たちに主イエス・キリストのみ救いをお与え下さり、有難うございます。

私たちがこの様に信仰が与えられる為には、代々の聖徒達が、迫害の中も、信仰を守り、伝え続けてくれた事によるものです。

その恩を忘れず、永遠の命、永遠の栄光に目を注ぎ、福音を伝え、信仰を守り抜く者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈り致します。

アーメン。